

コロナ禍で直接介護に携わった介護職員のストレス実態調査

合同会社ハビリス 船津 幸美
寿海荘 河田 勝志
下関市社協下関ホームヘルパーステーション 川尻 光子
員光園 佐藤紀久美
セービング 堀木 美鶴
グループホームあさくら 伊木 康人

I. 研究目的

新型コロナウイルス感染症が、令和5年5月8日より「2類相当」から「5類感染症」に移行し、様々な感染対策が緩和された。

それに伴い厚生労働省が令和3年3月に発表した「新型コロナウイルス感染症に対応する介護施設等の職員のためのサポートガイド」の「新型コロナウイルス感染症が流行する中でのストレスや不安」が、下関市の介護職員ではどのように変わったのか。またコロナ禍のストレスは、勤務している事業所や経験年数、資格、役職等により違いがあるのか。そしてコロナ禍で介護職員がどのような介護に対し最もストレスが大きかったのかなどを明らかにするため、意識調査を試みた。

II. 研究方法

1. 対象

「一般社団法人 山口県介護福祉士会 下関ブロック」の代表者に依頼し、本研究の趣旨を理解して協力してくれる下関の「特別養護老人ホーム(以下特養)」、「介護老人保健施設(以下老健)」、「通所介護(以下DS)」、「訪問介護(以下HH)」、「有料老人ホーム(以下有料)」、「その他」の21事業所の450名の内、アンケート調査に協力してくれた計409名(回収率90.9%)。内「看護職」及び「設問X」の①~④の半分以上が未記入のアンケートについては、欠損値が多いので除外し、有効件数は406名(回収率90.2%)となった。

2. 調査方法

留置法による自記式質問紙調査

アンケートとシール付き封筒を渡し、各自が記入後に封をして事業所毎のアンケート回収袋に入れていただきたい旨を封筒に明記した。

3. 調査実施期間

2023年7月1日~2023年7月31日

4. 主な調査内容

年齢や性別、事業所種類、介護の経験年数、雇用形態、資格、役職など、コロナ禍で感じたストレスの強さについて調査を実施した。

5. 調査に際しての倫理的留意

調査実施に際しては、調査対象者への調査目的の説明を行い協力の同意を得た。調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、データ管理責任者を決めて一元的に管理を行った。

6. 分析方法

全体の単純集計と事業所別、雇用形態別、経験年数別、同居家族別ストレスの度合いなどについてクロス集計を実施した。

III. 結果と考察

1. 基本属性

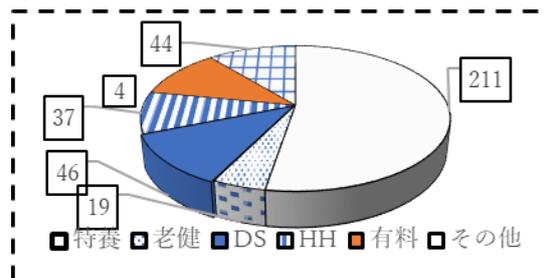
① 年齢について

19歳から81歳までで、平均は46.82歳(標準偏差値±12.30)

② 性別(表1)

性別	回答者数	%
男性	109件	26.98%
女性	295件	73.02%

③ 事業所別



事業所別の円グラフ (図1)

特養の職員が 52.62%、老健は 4.74%、DS は 11.47%、HH は 9.23%、有料は 10.97%、その他は 10.97%だった。その他は、「障害者支援施設」、「介護医療院」、「ショートステイ」、「地域密着型老人福祉施設」の記載があった。

④ 介護の経験年数について

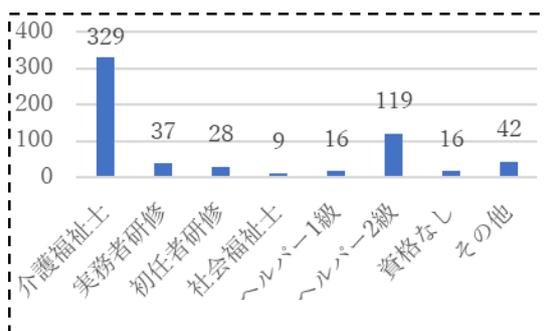
3カ月から38年で、平均は14.09年(標準偏差値±7.38)だった。

⑤ 雇用形態 (表2)

	ケース	%
正社員	305件	75.50%
パート職員	73件	18.07%
契約社員	16件	3.96%
その他	10件	2.48%

その他は、「嘱託職員」や「臨時職員」だった。

⑥ 取得資格

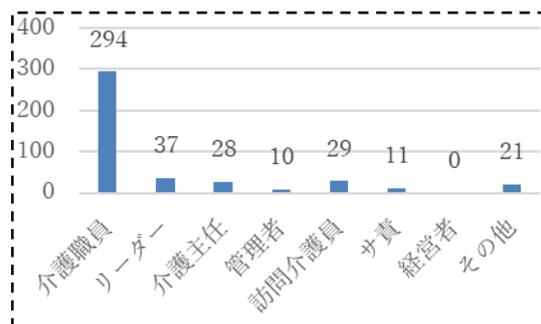


取得資格別の棒グラフ (図2)

複数回答で、回答者の8割以上が「介護福祉士」の資格を持っていた。「その他」は「介護支援専門員」が最も多く19名、「看護師」が7名、「その他」は「社会福祉主事」、「ガイドヘルパー」、「ヘルパー3級」、「栄養士」、「保育士」などだった。

また「介護福祉士」資格だけを持っているのは197名。「実務者研修」のみが6名、「初任者研修」のみが7名、「社会福祉士」のみが0名、「ヘルパー1級」のみが2名、「ヘルパー2級」のみが29名、「資格なし」のみが16名、「その他」のみが8名で内看護師が6名だった。

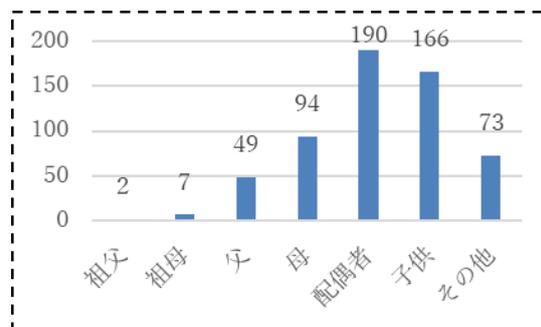
⑦ 役職



役職別の棒グラフ (図3)

複数回答で、介護職員として勤務をしている回答者が72.41%。「リーダー」が9.11%、介護主任が6.90%、管理者2.46%、訪問介護員7.14%、サービス提供責任者2.71%、介護に直接携わる経営者は0%、その他は5.17%だった。「その他」は「サブリーダー」、「介護副主任」、「生活相談員」などだった。

⑧ 同居家族



同居家族別の棒グラフ (図4)

複数回答で、「配偶者」と同居している回答者が最も多く46.80%。その次が「子供」との同居の40.89%だった。「その他」は、「一人暮らし」、「義父母」、「兄弟」、「弟」、「彼氏」、「猫」、「犬」などだった。

⑨ コロナ感染状況 (表3)

	ケース	%
自分がコロナ陽性者になった	143件	35.22%
自分がコロナの濃厚接触者になった	140件	34.48%
自分以外の職員がコロナの陽性者になった	302件	74.38%
自分以外の職員がコロナの濃厚接触者になった	273件	67.24%
自職場が休業した	23件	5.67%
自職場が縮小した	7件	1.72%
自職場に感染者と濃厚接触者はいなかった	2件	0.49%

回答者の75%近くの事業所でコロナの陽性者が発

生し、35%以上の回答者がコロナに感染をしていた。
2.項目別ストレス度

回答者にはアンケートの項目ごとに「全くなかった」、「あまりなかった」、「ややあった」、「とてもあった」の4段階で、自分の気持ちにもっとも近いと思う所に○をしてもらった。(表4)

選択肢	点数
全くなかった	1点
あまりなかった	2点
ややあった	3点
とてもあった	4点

結果を各項目ごとに「表4」で計算し、回答者の数で割り平均の数値を小数点第2位まで出した。

【感染について】(表5)

選択肢	点数
自分が感染するのではないかという不安	3.50点
利用者が感染しているかもしれない不安	3.38点
利用者に感染させてしまうのではないかという不安	3.48点
自分が家族に感染させてしまうのではないかという不安	3.30点
家族に感染させられてしまうかもしれない不安	2.97点
平均	3.33点

「自分が感染するのではないかという不安」が一番強く、次が「利用者に感染させてしまうのではないかという不安」だった。介護職員は「自分が感染する」のとはほぼ同程度「利用者に感染させてしまうこと」にストレスを感じていたことが分かった。

感染についての質問の中では、「家族に感染させられてしまうかもしれない不安」が最も低かった。

【感染対策について】(表6)

項目	点数
感染者への具体的な対応方法が分からないことによる不安	2.83点
感染者に自分が適切な対応ができるかの不安	3.10点
感染者に自分以外の職員が適切な対応ができるかの不安	2.76点
過度な感染予防策を強いられることへのストレス	3.22点
感染予防対策など普段と異なる仕事方法へのストレス	3.34点
過度な面会制限や感染予防策により、	3.16点

利用者の状態が悪化しないかの懸念や不安	
平均	3.07点

「感染予防対策など普段と異なる仕事方法へのストレス」が最も高く、最も低いのは、「感染者への具体的な対応方法が分からないことによる不安」だった。言い換えれば、「普段と同じ仕事方法」であれば、コロナ禍でもストレスは少なかったと推察できる。

【感染拡大予防について】(表7)

項目	点数
利用者のバイタルチェックを頻回にするストレス	3.00点
利用者のバイタルチェック等を市へ報告しなければならないストレス	2.39点
今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安	3.47点
平均	2.96点

「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」が最も高く、「利用者のバイタルチェック等を市へ報告しなければならないストレス」が、最も低かった。「市への報告」は職員全員がしていた訳ではなく、限られた職員のみが実施していたのでストレス度が低かったのかもしれない。

【介護について】(表8)

項目	点数
食事介護を実施するときの感染の不安	3.07点
排泄介護を実施するときの感染の不安	3.12点
入浴介護を実施するときの感染の不安	3.05点
移乗介護を実施するときの感染の不安	2.99点
口腔ケアを実施するときの感染の不安	3.17点
平均	3.08点

5つの介護の中で、利用者がマスクを外し唾液に触れる「口腔ケアを実施するときの感染の不安」が最も高く、その次が排泄物に触れる「排泄介護を実施するときの感染の不安」だった。コロナウイルスは飛沫感染をするし、排泄物にもコロナウイルスが排出されるとの基礎知識があり、ストレスが高かったと思われる。

短時間で終わる「移乗介護を実施するときの感染の不安」が、介護の質問の中では最も低かった。

【追加になった手間について】(表9)

項目	点数
感染対策の手洗いのストレス	2.67点

感染対策の消毒のストレス	2.84 点
感染対策の防護服の着脱のストレス	3.26 点
感染対策の防護服を着用して 介護を実施するストレス	3.29 点
感染対策のフェースシールド着用の ストレス	3.34 点
平均	3.07 点

「感染対策のフェースシールド着用のストレス」が最も高く、コロナ禍以前より実施していた「感染対策の手洗いのストレス」が最も低かった。普段とは異なるフェースシールドや防護服の着用が、とてもストレスになった事が分かった。

【認知症の方に対して】(表 10)

項目	点数
認知症の方の徘徊によるストレスの悪化	2.86 点
認知症の方の帰宅願望による ストレスの悪化	2.72 点
認知症の方に感染予防の為の 行動制限が出来ないストレスの悪化	2.97 点
コロナ禍により 認知症状が進行したストレス	2.85 点
平均	2.85 点

「認知症の方に感染予防の為の行動制限が出来ないストレスの悪化」が最も高く、「認知症の方の帰宅願望によるストレスの悪化」が、最も低かった。ただすべての項目で「3 点」を超える事はなく、コロナ禍で認知症の方への対応がとても大変だったのではないかと予想していたが、違っていた。

【その他】(表 11)

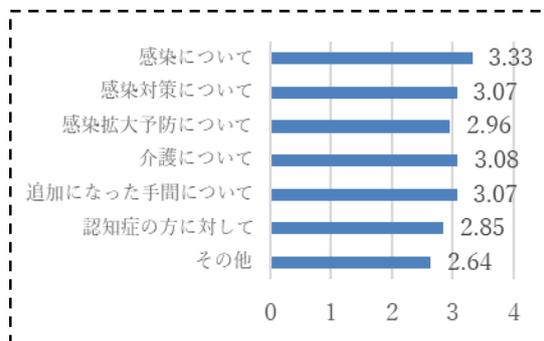
項目	点数
休みがとれないストレス	2.72 点
外食ができないストレス	3.10 点
県外に出られないストレス	3.21 点
他職員との交流制限のストレス	2.89 点
家族との交流制限のストレス	2.85 点
収入が減ることのストレス	2.41 点
残業が増えたストレス	2.54 点
職場の人間関係が悪化したストレス	2.14 点
利用者からの要望等に伴う プレッシャーやストレス	2.57 点
利用者家族からの要望等に伴う プレッシャーやストレス	2.54 点
利用者と外出が出来ないストレス	2.30 点
利用者イベント(行事)が出来ない	2.46 点

ストレス	平均
	2.64 点

「県外に出られないストレス」が最も高く、次に「外食できないストレス」が高かった。「家族との交流制限のストレス」より「他職員との交流制限のストレス」の方が高かったことに驚いたが、介護職には守秘義務があるため職員同士でなければ共有できないことが多いことも関係しているのではないかと感じた。

40 個の質問項目の中で最も低かったのは「職場の人間関係が悪化したストレス」だった。コロナ禍で感染した職員の代わりに残業や休日出勤など大変だったと自由記述には記載されてあったが、それでも人間関係が保たれていたのは介護職ならではのかもしれない。

【各項目の平均値の比較】

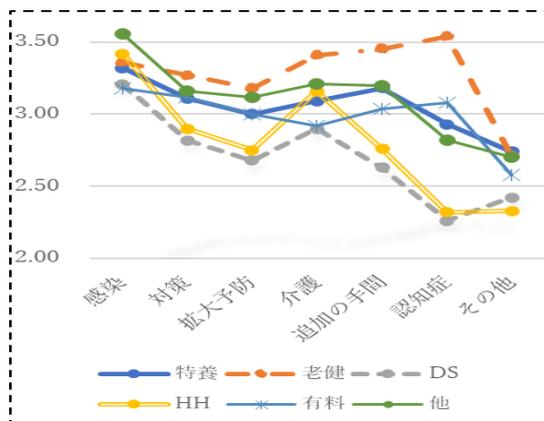


各項目の平均値の棒グラフ (図 5)

基本的な「感染について」の質問が最もストレス度が高く、「その他」として挙げた質問項目はストレス度が低かった。

3.属性別比較

【事業所別比較】



事業所別の項目平均値の折れ線グラフ (図 6)

事業所別に各項目の平均を出してみた。すると、「感染」と「その他」以外老健が最もストレスが高かった。「DS」は「感染」と「その他」以外は最

もストレスが低かった。

「特養」の職員が最もストレスを感じたのは、3.50点の「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」で、その次が3.48点の「自分が感染するのではないかと不安」、 「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」だった。

「老健」の職員が最もストレスを感じたのは、3.72点の「感染対策のフェースシールド着用のストレス」、と「認知症の方の徘徊によるストレスの悪化」だった。

「DS」の職員が最もストレスを感じたのは、3.38点の「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」で、次が3.36点の「自分が感染するのではないかと不安」だった。

「HH」が最もストレスを感じたのは、3.53点の「自分が感染するのではないかと不安」、 「利用者が感染しているかもしれない不安」、 「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」だった。

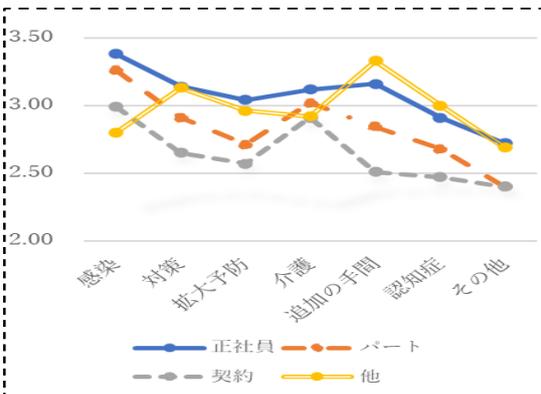
「有料」の職員が最もストレスを感じたのは3.55点の「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」で、次が3.41点の「自分が感染するのではないかと不安」と「感染予防策など普段と異なる仕事方法へのストレス」だった。

「その他」の職員が最もストレスを感じたのは、3.80点の「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」で、次が3.77点の「自分が感染するのではないかと不安」だった。

最もストレスが低かったのは、ヘルパーのみ「利用者とイベント(行事)が出来ないストレス」で、それ以外は全て「職場の人間関係が悪化したストレス」だった。

全体を比較し「認知症の方に対して」のストレス度が、「老健」では3.54点だったのに対し、「DS」では2.26点と低く、かなり差があったのに驚いた。

【雇用形態別比較】



雇用形態別の項目平均値の折れ線グラフ (図7)

雇用別に各項目の平均を出してみた。すると、「正社員」が「追加の手間」と「認知症対応」以外最もストレスが高く、「契約社員」が「感染」以外最も低い結果となった。

正職員が最もストレスを感じたのは、3.55点の「自分が感染するのではないかと不安」で、次が3.54点の「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」だった。

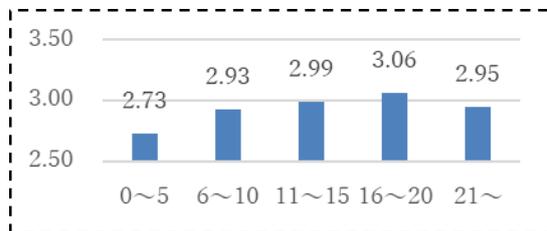
パート職員が最もストレスを感じたのは、3.49点の「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」で、その次が3.39点の「自分が感染するのではないかと不安」だった。

契約社員が最もストレスを感じたのは、3.31点の「自分が感染するのではないかと不安」で、その次が3.19点の「利用者が感染しているかもしれない不安」と「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」だった。

その他の職員が最もストレスを感じたのは、3.75点の「感染対策のフェースシールド着用のストレス」だった。

最もストレスが低かったのは、全て「職場の人間関係が悪化したストレス」だった。

【経験年数別比較】



経験年数別の平均ストレス度の棒グラフ (図8)

介護の経験年数別に各質問項目の平均を出してみた。すると、「16年目~20年目」が最もストレスが高く、その次が「11年目~15年目」、次が「21年以上」となった。経験年数が長ければ長いほど、コロナ禍でのストレスが高くなる訳ではなかった。

介護の経験年数が「0~5年」の回答者は、「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」が一番強く、3.42点だった。

介護の経験年数が「6~10年」の回答者は、「自分が感染するのではないかと不安」が一番強く、3.52点だった。

介護の経験年数が「11~15年」の回答者は、「利用者に感染させてしまうのではないかと不安」が一番強く、3.56点だった。それ以外に、「自分が感染するのではないかと不安」も、3.52点だった。

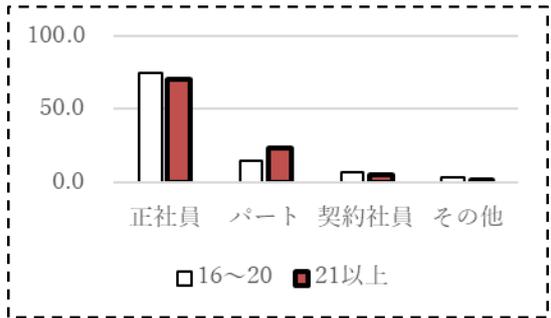
介護の経験年数が「16～20年」の回答者は、「利用者に感染させてしまうのではないかという不安」と「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」が一番強く、3.61点だった。それ以外に、「自分が感染するのではないかという不安」も3.59点、「利用者が感染しているかもしれない不安」も3.50点だった。

介護の経験年数が「21年目以上」の回答者は、「自分が感染するのではないかという不安」が一番強く、3.57点だった。それ以外に、「今の状態がいつまで続くのか見通しの立たないことへの不安」も、3.51点だった。

最もストレスが低かったのは、全て「職場の人間関係が悪化したストレス」だった。

介護の経験年数を重ねるにつれストレスの点数が上がっているのに、21年の経験以降でストレス値が下がっていたのは何故か、違いを調べてみた。

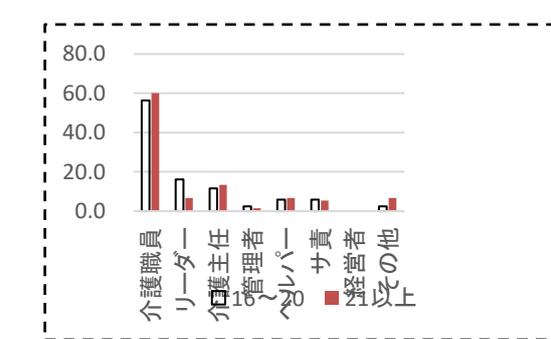
【経験年数「16～20年」と「21年以上」の勤務形態割合比較】



経験年数「16～20年」と「21年以上」の勤務形態割合棒グラフ(図9)

介護の経験年数が「16～20年」と「21年以上」の勤務形態を比較してみた。「21年以上」の方が「16年～20年」と比較して正社員が少なくパートが多い事が分かった。「21年以上」の「その他」にも、「再雇用」があった。

【経験年数「16～20年」と「21年以上」の役職割合比較】



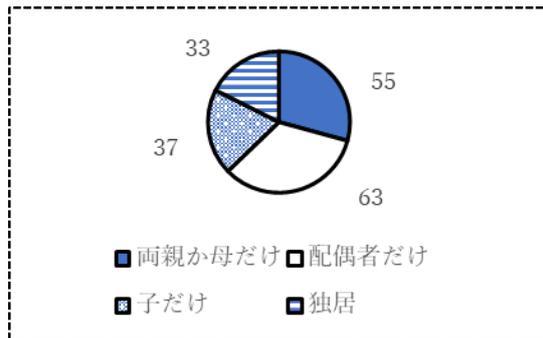
経験年数「16～20年」と「21年以上」の役職割合棒グラフ(図10)

棒グラフ(図10)

介護の経験年数が「16～20年」と、「21年以上」の雇用形態について比較してみた。「21年以上」の方が「16年～20年」と比較して「介護職員」が多く「リーダー」の割合が少ない事が分かった。

介護の経験年数を重ねるにつれストレスの点数が上がっているのに、21年の経験以降でストレス値が下がっていたのは、正社員やリーダーの割合が少ないことに関係しているかもしれない。

【同居家族の比較】



同居家族の割合円グラフ(図11)

同居家族について調べた。「祖父」だけは0名、祖母だけは1名で「祖父母」だけは1名だった。「父」だけは0名、「母」だけは27名、「父と母」だけは55名だった。「配偶者」だけは63名、「子」だけは37名、「1人暮らし」は33名だった。回答者の年齢が19歳～81歳と幅が広い為、同居家族の年齢は様々である。しかし同居家族によりストレスの度合いは異なるのではないかと考え、「両親か母」だけと「配偶者」だけ、「子」だけ、「その他」の「1人暮らし」の回答者で比較をしてみた。

【同居家族別別比較】



同居家族別の項目平均値の折れ線グラフ(図12)

「1人暮らし」は感染に対するストレスの度合いが、「両親」や「配偶者」、「子」と同居している回答者に比べかなり低かった。最もストレス度が高かった

のは両親と同居の回答者で、全項目に置いて最も高い数値を示していた。

IV. 結論

厚生労働省が令和3年3月に発表した「新型コロナウイルス感染症に対応する介護施設等の職員のためのサポートガイド」の「新型コロナウイルス感染症が流行する中でのストレスや不安」で、全国の介護職員の強いストレスは「今の状況がいつまで続くのか見通しのたたないことへの不安」、「利用者に感染させてしまうのではないかという不安」、「自身が感染するのではないかという不安」だった。今回調査に協力してくれた下関市の介護職員も、5類相当変更後も同様の意見で変化は見られなかった。

また、「老健」や「特養」、「有料」の宿泊を伴う施設で勤務し、介護の経験年数が「16～20年」の正社員で両親と同居をしている職員は、コロナ禍でストレスが強かったことが明らかになった。

今回研究調査を実施する中で、自由記述の中に「過去形で話を進めないで欲しい」、「今も同等のストレスを感じながら働いている」との記載があった。「2類相当」から「5類感染症」に移行し、様々な感染対策が緩和されても、「新型コロナウイルス感染症」が消滅した訳ではなく、介護職のストレスは継続している。この現状を行政へ理解をしてもらい、介護職のリーダーである介護福祉士会として何ができるのか、模索し続けていくことが必要だと考える。

謝辞

本研究にあたり、業務多忙の中で快くご協力頂いた下関市の介護事業所と介護職員の皆様に、深く感謝致します。

引用文献・参考文献

1) 厚生労働省「新型コロナウイルス感染症に対応する介護施設等の職員のためのサポートガイド」令和3年3月

(<https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000757739.pdf>)

2) 井上 務「特別養護老人ホームにおける中堅・ベテラン期介護職員の組織社会科プロセス」2023.3 (日本社会福祉学会中部部会 「中部社会福祉学研究」第14号)